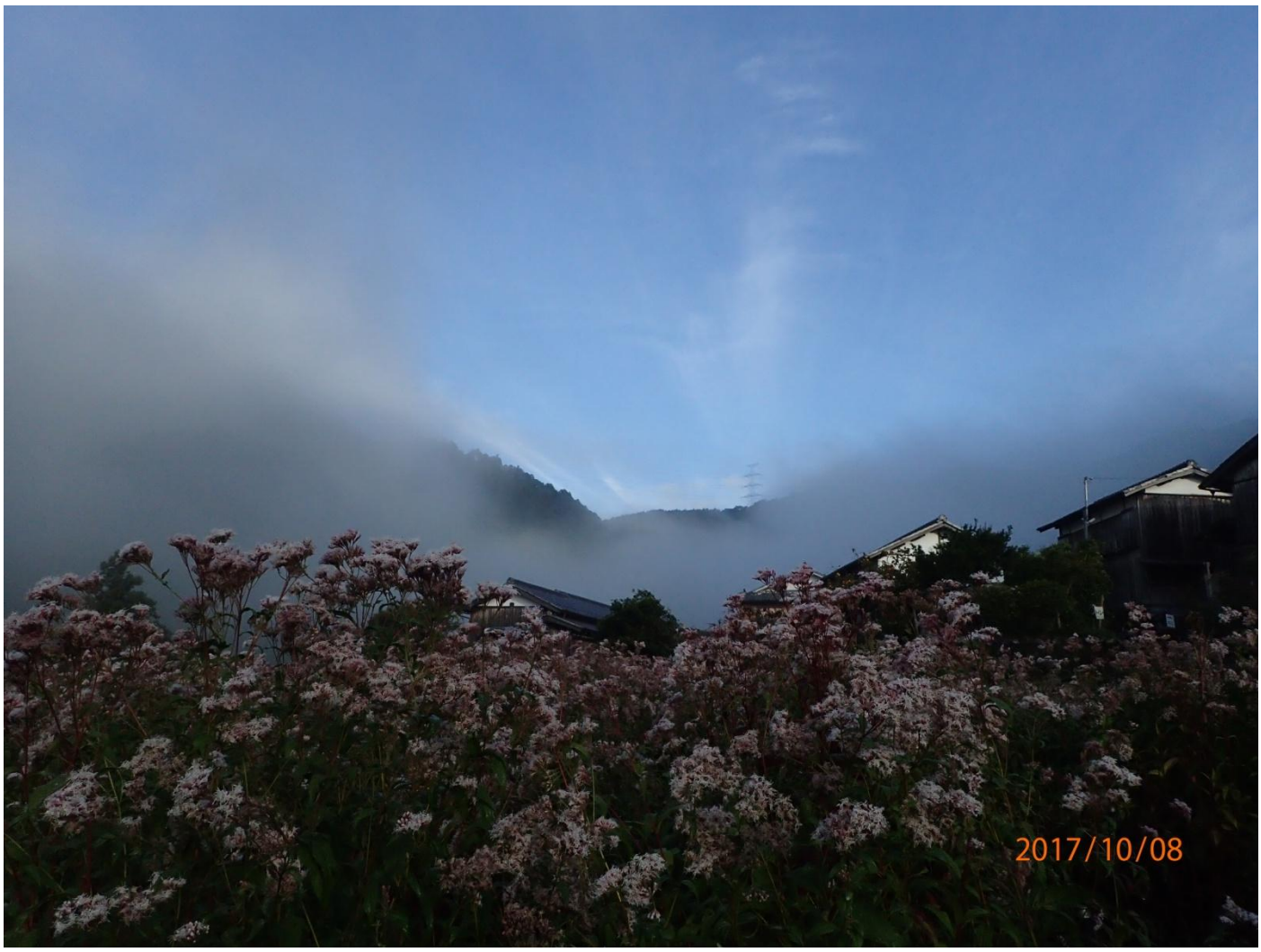
京都・水尾のアサギマダラ

2017 年秋

BV アサギマダラの会・金田 忍



愛宕山の中腹にある水尾のフジバカマ畑

今年のイベントは、9 月 29 日から 10 月 8 日まで行われました。フジバカマの花が早く咲きすぎて、アサギマダラが来るかどうかが危ぶまれましたが、標識数は昨年を少し上回る 1900 頭余りとなりました。ただし、越夏地からの再捕獲は昨年(41 頭)を大幅に下回る 33 頭に終わりました。その理由は、夏から秋にかけての高温により、イベント直前まで中部山岳地帯以北の越夏・繁殖地がアサギマダラで賑わい、南下移動が始まらなかったことにあると思います。

今後もこのような気象の傾向(温暖化)が続くかと思うと、フジバカマの開花時期を、遅れがちなアサギマダラの飛来に合わせて調整することも考えなければならなくなるでしょう。京北町下黒田では、園芸種のフジバカマ(サワフジバカマとも呼ぶ)が 10 月初旬から開花し、下旬までの長期にわたってアサギマダラが数百頭も乱舞しました。園芸種のフジバカマは、白絹病にも根こぶセンチュウにも強いのが特徴で、株分けで繁殖し、肥料は不要、除草と消毒は必要だそうです。

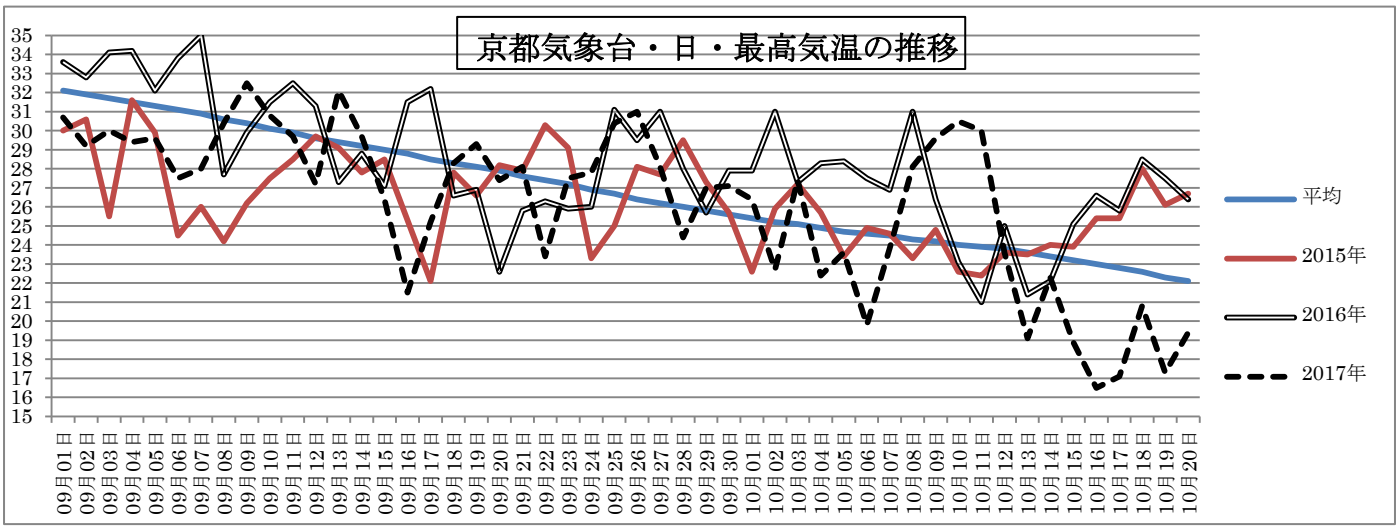
・はじめに

水尾の秋のイベント・**水尾フジバカマ鑑賞会**は、今年で七年目になります。京都市の西部で発見された原種のフジバカマを護るため、その数年前から地元の有志で保護・増殖してきたフジバカマ畑は、年々株数を増やして今では 1000 平方メートル近くの栽培規模となり、おそらく日本一の広さと密度かと思われます。

年々過疎化と高齢化が進む中での除草・消毒・施肥・剪定・灌水などの作業負担は大変だったろうと思われますが、今年は予定よりも 10 日も早くフジバカマが満開となり、関係者をはらはらさせました。

京都・水尾で始められたフジバカマの大規模栽培は、ここ六年間に全国に波及し、あちこちにフジバカマ花壇や花園などが出来てアサギマダラが飛来するので、アサギマダラの移動調査も一段と前進、普及しました。その結果アサギマダラの生態解明も進みましたが、アサギマダラ自身も蜜元や繁殖に必要な PA を摂取しやすくなったなど、種の存続にも貢献していることになります。

・京都気象台の最高気温の推移



・**2015** 年は 9 月中旬までは平年を下回る気温で推移したので、アサギマダラは南下を促され、近畿地方に達した時点で平年に戻ったため、500 メートル前後の山中が移動高度となり、水尾や大原野などの中腹にあるフジバカマ畑に多くのアサギマダラが誘引されたものと思われます。

・**2016** 年は、9 月下旬から 10 月初旬にかけて真夏日や夏日が続き、南下が中部地方で停滞していたところ、10 月 10 日から一転して 10℃も下がったので、アサギマダラは中腹のフジバカマ畑を素通りして、暖かい平地に下りてしまいました。

・**2017** 年は、10 月 6 日まではおおむね平年前後の最高気温で推移しておりましたが、その後一週間は著しく気温の高い日が続きました。その後一転して平年を 7℃も下回る気温となり、平地のフジバカマ畑がアサギマダラで賑わいました。

・今年の水尾

毎年毎年、異常気象が話題になりますが、今年のパターンは高温が秋まで続いたことです。その結果、白絹病が蔓延し始めました。白絹病は、高温・多湿下で起こり、一度罹ると助からないと言われている伝染病です。病原菌はキノコの一種である担子菌で地中や地表の有機物を分解しながら増殖し、野菜や園芸植物、樹木など多種(ある文献では 216 種)の植物を枯らすとあります。その結果、次々と伝染して畑は斑に枯れ、その面積は拡大してゆきます。この担子菌は農薬にも強く、また、農薬を使う方法は何度もすき返す作業負担が大きいので、あまり使われていません。一般的には水田との転作が多用されています。

先にも書きましたが、今年はフジバカマの開花が期待していたよりも 10 日以上早く、9 月初旬からアサギマダラの飛来が見られました。飛来のピークは 9 月下旬で、多い日には 1000 頭前後の乱舞が見られました。京都地方への飛来のピークは 10 月 10 日過ぎてからですが、その頃水尾のフジバカマは終わってしまい、匂いに誘われて飛来したアサギマダラも、蜜がないのが分かると、そそくさと飛び去ってゆきました。標識数は 1972 頭と、昨年を上回りましたが、北国からの飛来は 33 頭と振るいませんでした。

アサギマダラの飛来数はフジバカマの開花状況と、天候(主として最高気温の推移)の影響を強く受けます。フジバカマの開花は計画よりもかなり早く始まり、9 月初旬にはアサギマダラの飛来が見られるようになりました。イベントは 9 月 29 日から 10 月 8 日へかけて行われましたが、10 月 6 日以降は飛来が非常に少なくなりました。花が終わってしまったのです。最高気温は 10 月 8 日から夏日に戻り、10・11 日は真夏日になりました。その後一転して平年を大きく下回る気温となったので、アサギマダラは中腹のフジバカマ畑を素通りして、より暖かい低地に降りてしまったようです。平地の河川敷や池の近くのフジバカマ畑がアサギマダラで賑わうのが観察されました。

標識総数は 1972 頭(内♀44 頭)で、2016 年の約 1500 頭よりは少し多く、2015 年の約 5000 頭の半分以下の成績でした。

どこから来たか

主たる繁殖・越夏地である中部山岳地よりも東・北の地(以下**東・北日本**と呼ぶ)から来たものと、日本海側(石川・岐阜・福井)、太平洋側(愛知・三重)、近畿に分けて統計をとりました。

今年は再捕獲が 33 頭ありましたが、その内 23 頭(70%)は東・北日本からのものでした。次に日本海側(石川・岐阜・福井)で標識されたものは、7 頭(21%)ありましたが、太平洋側(愛知・三重)からは、3 年続けて 0 でした。つまり、太平洋側を通って京都にくるものは無いか、非常に少ないという事です。

水尾から飛んで、台湾で第一号が再捕獲されました

9 月 23 日に水尾で標識したアサギマダラが、その 45 日後の 11 月 7 日に台湾澎湖島で周麗炤さんにより再捕獲されました。李信徳さんから facebook を通じて連絡を受けたものですが、台湾での第一号でした。水尾からは南西にあたり、海を越えて直線距離で 2013km 飛んだことになります。調査の歴史が始まって以来、ちょうど 50 頭目となって注目され、KBS テレビでも紹介されました。

水尾で標識した 1972 頭のうち、41 頭が再捕獲されていますが、ここ 3 年間で一番少ない数字です。愛知で 2 頭再捕獲されたのは台風の影響と思われます。四国では 8 頭で昨年(30 頭)の 27%と少なく、代わりに中国・九州というルートが昨年の倍以上でした。南西諸島は昨年(2 頭)の倍以上の 5 頭でしたが、台湾を含めると多いと言えます。

最後になりましたが、アサギマダラの調査をご支援くださった水尾自治会のみなさま、写真家のみなさま、そのほか調査に関わった全国の仲間、中でも BV アサギマダラの会の仲間には、心から感謝申し上げます。

(2017.11.30.記)

<<<付録>>>

・白絹病についての情報

白絹病について調べてみました。

・**長野県**北部にある大町市の、**のっぺ山荘**のフジバカマ畑は 20 年以上連作していますが、白絹病に罹ったことはないという事です。(田原 富美子氏談)

・**山口県**下関市の**リフレッシュパーク豊浦**のフジバカマ畑は 5 年前に白絹病が蔓延し、今ではコスモスとの転作で対応しているようですが、それでも発病することがあり、苦労しているそうです。(福村拓巳氏談)

・**山口県・大島(屋代島)** 白絹病は大島でも各地で発生しています。特に最近ブームになって作られたフジバカマ園で 1 年目と 2 年目くらいまでは良いのですが、今年は 3 年目の畑で多く発生したようです。発生のひどいところは来年全部引き起こして植え替えをしようと言うことになっています。例外的なことですが、我が家の庭では植えてもう **30 年**くらいたっていますが、**白絹病の発生は一度もありません。**むしろほかの植物を圧倒して毎年広がっています。広がりすぎると引き起こして人にあげたりしているくらいです。2 年前に村島さんより京都・西山の原種フジバカマを秋に一鉢送っていただきました。病気が心配なので鉢のまま冬を越させ地面には降ろしませんでした。翌年の春、鉢から正常に芽が出て伸びていたのですが 6 月ごろになってにわかに勢いが衰

え、一部枯れ始めました。それで、白絹病の防除薬を濃いめにしてジョロでしばらくの間灌水代わりに与えました。そうするとしばらくしてまた新芽が出てきて勢いを回復しました。以後は正常に成長しています。今年はもう大丈夫とみて、庭に降ろしました。異常なく育っています。(山本弘三氏談)

・**屋久島**では、フジバカマはどこに植えても、夏には必ず枯れるそうです。(久保田義則氏談)

・**沖縄**ではフジバカマは栽培されていないようです。(福村拓巳氏談)

・**近隣**では、**大原野**のフジバカマは、今春鋤き直して全面的に植え替えましたが、ほぼ半数の株が被害を受けています。

という事から、白絹病の病原菌は暖地または熱帯性のもので、温暖化を背景にして今後ますます蔓延することが懸念されます。

・**京都府京都乙訓農業改良普及センター**に相談したところ、水田との転作が良いだろうとのことでした。理由は一番手間と費用がかからず、病原菌は４か月ぐらい水に浸けておけば必ず死滅するのだそうです。

・フジバカマはもともと氾濫原や崩壊地などの有機物を含まない土壌に群落を作っていました。数年たって他の植物が侵入してくると、フジバカマは他の氾濫原や崩壊地に移り住んで生き残ってきたのです。今では氾濫原や崩壊地が無くなって絶滅危惧種に指定されています。

・白絹病に罹ったフジバカマと病原菌の菌核

・大原野のフジバカマ畑です。白絹病で枯れた場所には鉢がおいてあります。次々と伝染して枯れたのが判るでしょう。

・白絹病で枯れた場合はどうしたら良いかというと、気が付いたらただちに引き抜いて焼却します。地面には消石灰を多量に撒いて耕転して、とりあえず病原菌の増殖を押さえます。その場所に鉢などを置いてはいけません。必ず感染するからです。病原菌は非常に生命力が強く、有機物(食べ物)を与えないでも地中で 5～6 年は生きていますが、水を張るなどして酸素を絶てば数か月で死滅するそうです。